
地球最後の日はカレー

nekokuti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球最後の日はカレー

【Nコード】

N6583Q

【作者名】

nekokuti

【あらすじ】

航空宇宙技術や遺伝子工学が発達した近未来。

容赦ないエイリアンと戦う人類。

でも負け戦。

地球最期の日、あなたは何を食べたいですか？

真空と放射線にさらされる望遠レンズ。内部機構のシャッターは黒々として、まるでまばたきしない動物の瞳のようだ。

そのレンズの表面に、赤黒く爛れひび割れた鬼灯のような球体が反射する。

地球だ。

人類発祥の惑星にして暖かいゆりかご。

いまやそのゆりかごは火を放たれ、ひと握りの生き残りがゆりかごをあとにしようとしている。

太陽系連邦深宇宙軍が手に入れることができた最後の戦艦、DSF-SS701”アネモネ”の艦橋につめかけた人々は、せめて最期の姿を目に焼きつけようと中継映像を凝視していた。

瞬きも忘れてみつめたせいか、人々は涙を流している（いや、ちがうだろ）。

スクリーン上の惑星が震え、一回り小さくなったように思えた。

集まった人々のどよめきが一拳に増す。

惑星がまた大きく震えた。

スクリーンに小さなウィンドウがポップアップする。そこには地

球を輪切りにした白黒のニュートリノ断層画像が流れている。

シャワーのような荷電粒子と放射線にさらされて干からびた地球の薄皮が盛り上がり、裂け、内部のもつと赤黒い液がにじみだした。マグマだ。

吹けば飛びそうな薄皮は大陸を乗せた地殻だった。それが火で炙られたリンゴのように皺々になって、上下逆さまにめくれあがった。かつて人々が不動の安心感を寄せたものが呆気なく崩壊してゆく。

いままた大きなカケラが引っくり返った……北米大陸だ。

あの地に住んでいたことがあるのか、むせび泣く声がひときわ高まった。

地球の気候はとうの昔に吹き飛び、海は干上がっている。それでも、あの壊れかけた星はかけがえのないホームだったのだ。

中心核で暴れまわるブラックホールは加速度的に巨大化して、濃密なマントルを食い荒らす。実際のところ、地球質量の9割が飲み込まれるのは最後の数秒だ。1世紀も前に打ち込まれて以来、静かなる破局に向かって這い進んできた小さな種子は、いままさに惑星を食らわんとしている。

緊迫感をはらんだ空気が満ちた艦橋のどこかで誰かがひどいタイミングで盛大にくしゃみをしているが、一人として注意を払う者はいない。

ついにジ・エンド。無念の詰み。

断末魔の地球が乾燥レーズンのように縮んだ瞬間、まばゆい閃光が太陽系をあまねく照らした。それは、ブラックホールに落ち込むマントルが、一瞬だが核融合を起こさんばかりに圧縮されたことを意味する。

アネモネに画像を中継していた小さな偵察衛星はひとたまりもなく蒸発した。

真っ白になったスクリーンが回復したとき、地球のあった場所は漆黒の宇宙空間が広がるばかりだった。唯一つあるものは、もともとの質量に地球一個を足したブルーベリー大のブラックホールだけ。

あまりにあっけない最期をもって、一大スペクタクルショーは終わった。人々はスクリーンから視線を外して、足取り重く自宅に帰り始めた。

そのとき一辺2kmの広大な艦橋の片隅では、一人の若者が啞然とした様子でスクリーンを見上げていた。

「か、完全に見逃した……」

くしゃみ三連発のために。

若者はがっくりとうなだれた。

このどこかエキゾチックなパン・パシフィック系の風貌をしたウカツ極まりない若者を”ノロイ”と呼ぼう。ノロイ・オーソドニクと。

ノロイが生まれたときには、ただ”大戦”と呼ばれ今も続く戦争は既にはじまっており、太陽系連邦はありとあらゆる兵器でハリネズミのように武装してエイリアンと戦っていた。

太陽の周りをぐるりとソーラ・パネルが帯をなし、いつでもエイリアン艦隊をレーザーで焼き払う準備をしていたし、月や木星の衛星はどれも丸ごと軍需工場に改造されていた。巨大な無人戦艦が毎日のように工場をロールアウトして、無敵のアニヒレーター砲が虚空を睨む。

まさしくハリネズミ。

ただ問題が一つ。エイリアンが評価するとすれば、人類が誇る最良の武装ですら、地上を這い回るハリネズミの針と大差ない危険度しかない点にあった。

その事実に気づいていなかったことは、人類にとって幸せだったのかもしれない。

ノロイは学校を卒業すると、個人用機動兵器”パーソナルスラスタ”のパイロットに志願して、一命を賭してエイリアンの侵攻をくい止めようと勇んだ。

しばらくしてついに敵が現れたとき、エイリアンはたった一度、高速で太陽系を横切っただけで去っていった。

残念なことに、ノロイはその時期たまりにたまった有給休暇を消化する旅行に出かけていて、エイリアンが現れたのを知ったのは敵が立ち去った後であった。

その後、エイリアンは長い長い時間、襲って来なかった。

人類とは時間の感覚が異なるのか、エイリアン是一向に攻撃してこない。

あまりに遅いので、全太陽系ネットのニュース番組はエイリアン関連の話題を全くとりあげなくなった。

むしろ”宇宙カルガモ親子の爆笑お引越”や”イオで多発！心霊現象の謎。スピリチュアル大先生がこのあと生解説！”とかなんとかの屑ニュースが優先されるようになった。

今ならわかる。もう攻撃はなされていたからだ。

みかん箱には、すでに腐ったみかんがぶちこまれていた。

その結果は、スクリーンで（ノロイ以外の全員が）見た通りだ。

人目もはばからずに嘆くノロイの横に、一人の少女が風切翼を大きく広げてふわりと降り立った。

「いい年してなにやってるのよ。130にもなって」

視線を上げもせず、ぐずぐずと鼻をすすり上げるノロイ。

「だって、だってさライナス。わたしあの美しい地球を守るために1世紀以上も戦ってきたのにさ、最期を看取れなかったんだよ。もう、いつもそう。いつも大事なときにタイミングを逃すのよ、わたしは」

「しょうがないじゃない。昔の偉い人は言ったわ。」直したくても直せないもの、それが個性”ってね。ママの不運は個性なのよ。さあ立って。家でゆっくり地球がブラックホールに吞まれる様を観賞しましょう」

「ライナスつたら。これじゃどちらが親だかわからないわね」

涙は艦内が低重力のために落ちることがない。ノロイの目許をライナスのほっそりとした指先がなぞると、小さな水滴が宙を舞った。

「ありがとう。でもうちに帰っても地球の映像はもう見ないわよ」

ライナスはにっこりと笑みを浮かべた。

「その立ち直りの早さもママの個性ね」

ライナスが手を差し出し、ノロイが握った。

二人は背中 of 羽をばさりと一振りして開く。つま先で床をひと蹴り、体が宙に浮いた。

力強い羽ばたきで、みるみる速度を上げてゆく。しばらくモジモジしてから、ライナスがノロイに顔を向けた。

「あの子ママ」

風を切る音がうるさいからインプラントで話しかけた。

「なに、ライナス」

ノロイの声もライナスの声と同じで頭の真ん中に直接響いた。

「今日はカレーがいいな」

「そうね、じゃあ今夜はあなたの好きなチーズカレーにしましよ
うね」

「やったあ」

まだ若い母親と少女は、手を取りあって自宅に至るシャフトを飛
んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6583q/>

地球最後の日はカレー

2011年5月4日10時11分発行